本校の教育相談で使用する主な検査器具

DN－CAS 認知評価システム	PEP-3自閉症・ 発達障害児 教育診断検査	WISC-Ⅳ知能 検査	K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー	田中ビネー知能 検査V（ファイブ）	改訂版 鈴木ビネー知能 検査
適用範囲 ５歳０か月～ １７歳１１か月 所要時間 ６０分程度	適用範囲 ２歳 ～１２歳 所要時間 実態によって異なります	適用範囲 ５歳０か月～ １６歳１１か月 所要時間 ６０分～９０分	適用範囲 ２歳６か月～ １２歳１１か月 所要時間 １５分～６０分	適用範囲 ２歳～成人 所要時間 ３０分～６０分	適用範囲 ２歳０か月～ １８歳１１か月 所要時間 ３５分～５０分
「プランニング」（P）「注意」（A）「同時処理」（S）「継次処理」（S）の４つの認知機能（ＰＡＳＳ）の側面から子どもの発達の様子を捉えることができます。 言語的知識や視覚的知識にあまり頼らずに認知活動の状態を評価できるよう工夫されているため、新しい課題に対処する力を見るのに適しています。	この検査は質問紙的なものではなく、用具をフルに使って子どもが楽しく遊ぶ場面を直接観察しながら診断ができます。 また、「合格（２点）」「不合格（０点）」の判定のほかに遊びに取り組もうとする「芽生え」の反応（１点）を観察することにより、臨床的に生きた手がかりを得ることができます。	適応範囲内の子どもを対象にした、世界でも広く利用されている代表的な児童用知能検査です。 全１５の下位検査（基本検査：１０、補助検査：５）で構成されており、１０の基本検査を実施することで、５つの合成得点（全検査ＩＱ：４つの指標得点）が算出されます。それらの合成得点から、子どもの知的発達の様相をより多面的に把握できます。	認知過程を継次処理と同時処理から評価し、得意な学習スタイルをみつけることができ、検査結果を教育・指導のプログラム作成に活用することができます。 ［例題］と［ティーチングアイテム］で課題が要求していることを十分に理解させた上で問題を実施するので、幼児や障害のある子どもの知的活動を適切に評価できます。	成人の知能は複雑で「一般知識」では捉えきれないほど分化しています。そこで得意不得意がわかるような分析的な診断ができるようにしました。 検査結果は、従来のＩＱではなく領域毎の評価点や領域別ＤＩＱ、総合ＤＩＱの５つ指標とプロフィールで示されます。これらを見比べることで個人の知能特徴を大変わかりやすく知ることができます。	特別な支援が必要な子どもたちを早期に発見し、最も適切な教育指導を作り出すための知能検査です。 思考を必要とする様々な問題（７６問）が易しいものから難しいものへと並べられて構成されています。問題の解決の過程および結果から被験者への知能の発達水準を測定することができます。

心理検査とは？

心理検査の目的は、個人の特つ心理学的特性を客観的に把握するために、心理学的方法論によって作成された測定の道具です。子どもの可能性や潜在性を見出し、指導の目標や指導内容・方法等の教育計画を立てるためには、心理検査の特徴を理解しながら子ども理解の補助的な方法として活用することが大切です。

心理検査は決して万能ではなく、どの検査にも限界や難点等があるので、使用目的を明確にし、あくまでも補助的道具として活用を図ることが必要です。

また、質問紙法によるテストやロールシャッハテスト等は被検査者の健康・心理状態や検査者の熟練等による影響を受けやすいので、結果は慎重に解釈することが重要です。

心理検査の結果はあくまでも検査時における資料であり、被検査者のすべてをとらえられるものではありません。このような課題を少しでも解決するためには、複数の検査を組み合わせるテスト・バッテリーにより総合的に判断します。

特別支援教育における相談支援の手引きより引用

本校にある検査器具に関するお問い合わせは、各学部特別支援教育コーディネーターまでご連絡ください。